
傷薬

凜花

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

傷薬

【コード】

N0350C

【作者名】

凜花

【あらすじ】

”デブ”この言葉に苦しめられてきた亜里沙。ある日、たまたま通りかかった旧商店街で、不思議な薬と出会う。それは、一粒でどんな”心の傷”も癒してくれる秘薬だという。本当にそんなすごい薬が存在するのだろうか？

(前書き)

世にも奇妙な物語りをイメージして書きました。学校へ提出した課題なので、まだまだ直しが必要ですが、とりあえず完結しています。

また、言われてしまった。“デブ”この言葉に、何度心を切り刻まれただろう。亜里沙は思う。デブは自分のせいではない。一人のことということもあり、両親が亜里沙を必要以上に甘やかしたせいで、物心ついた頃にはもう既に肥満と呼ばれる体になっていたのだ。思春期になって自分の体型が気になりだしたところで、急に運動をする体力もなければ本能として備わってしまった過剰な食欲を止めることもできなかった。

当然、中学三年生になった今も、亜里沙はまだデブのまま。彼女自身それに慣れてしまつて、多少“痩せたい”という願望はあるものの、それはダイエットを決心するほどの強い意志には結びつきはしない。せいぜい、効くと噂のダイエット食品を購入するくらいだ。それも、中学生の安い小遣いではたまにしか買えない。結局、痩せることのできない亜里沙は、今日もまたその体型のことでクラスメイトに心無い言葉を浴びせられたのだ。

昼休み、教室はからあげやハンバーグの匂いにつつまれて、あちこちで聞こえる談笑の声と共に和やかな雰囲気を放っている。亜里沙も仲良しの友達と一緒に、楽しみにしていた弁当を開けた。

と、その時。それを見ていた男子が、「げえー渡辺の弁当でかすぎ！ だからお前デブなんだよ」と大声をあげた。その言葉に、教室にいる男子がどつと沸き、数人が亜里沙のお弁当を覗きにやってきた。その中には、凧平拓真の姿もあった。少し前から彼に特別な気持ちを抱いていた亜里沙は、その姿を捉えた瞬間、恐ろしく時がスピードダウンしたのを感じた。

よりによって彼の前で笑いものにされてしまうなんて！ 文字通り、穴があったら入りたい気分だった。目に熱いものが込み上げるのを必死で抑えながら、一緒に弁当を食べていた友達の助けもあつ

て、なんとかその場をしのいだ。午後の授業が始まる頃には、みんなさっきのことなんてすっかり忘れていたが、クスクスと押し殺した笑が聞こえる度に自分のことを笑っているのではないかと不安になって、最悪な午後を過ごした。

そして、やっと六時間目が終わった。明日の限目の国語が数学に変わるといふ報告だけの短いホームルームが終わると、一日の中で一番楽しそうな雰囲気放っている教室を飛び出した。

帰り道、亜里沙は、気分が沈んだままいつもの賑やかな商店街を通るのが憂鬱で、その裏通りにある旧商店街へ足を進めた。旧商店街と言っても、今はほとんどの店が潰れて、もはや昔の面影はほとんどない。カメラ屋の埃をかぶったディスプレイに、そろそろアンティークと呼べるのではないか、というくらい旧型のカメラがぼつぼつと並べられている。値札なんかは劣化しすぎて、もう解読不可能だ。

店の奥でテレビの音がしているのに、店頭には誰も立っていないかった。

その隣の店は服屋だろうか。でっかいブタのプリントがしてある、サイズも大きめのTシャツを見て、亜里沙は余計に気を悪くした。まるで、心まで“デブ”になってしまった気分だ。あのサイズのTシャツを着るような太った人が、自分からブタのプリントを選ぶだろうか？ 考えれば考えるほど、デブを見下しているようで、心の体重は増える一方だ。

もういい、と、店を無視して通り過ぎようとした時、ある張り紙が彼女の目に留まった。紙は黄ばんで、文字の色も薄く褪せてしまっているその張り紙には、「どんな心の傷もたちまち治る特效薬、入荷しました」と書かれていた。その言葉は、今の亜里沙の心に強く訴えてきた。そして、彼女はまるで吸い寄せられるかのようにその店へ入っていった。

「いらっしやい」

亜里沙にとって、こういう古い店の店主はおばあさんやおじいさ

んのイメージが強かったが、その予想に反して若い女性が立っていた。長めの髪を後ろでひとまとめにし、馴染みやすい笑顔で迎えてくれた。

「あの、張り紙の薬って、本当に心の傷を治せるんですか？」

「何か、心に傷を抱えてるの？」

「あ、はい……えっと」

”デブ“って言われて傷ついてるんです、なんて恥ずかしくて言えない。口ごもった彼女に頷いて、女は後ろの棚から小瓶を取り出すと、少し声のトーンを落としてこう言った。

「効き目は抜群よ。ただし、副作用があるの」

「副作用？」

女につられて、亜里沙も声を低くする。

「この薬はね、心の傷を治す代わりに、その根本的原因を消滅してしまうの」

女の言っている意味がわからず、亜里沙はただ、目を瞬かせた。女は説明を続ける。

「例えば……そうね、あなたが頭が悪いと言われて傷ついたとしましょう？ それで、この薬を飲む。すると、あなたのお母さんがいきなり家庭教師を雇って、あなたは嫌でも勉強をせざるを得なくなるの」

いきなり突拍子な話が出てきて、亜里沙は思わず「え？」と、聞き返してしまった。そんな彼女にはかまわず、女はなおも説明を続ける。

「そして、あなたは必然的に頭が良くなって、頭が悪いと言って傷つけられることはなくなる。これがこの薬の効能と、副作用」

「……ちよつと待ってください！ そんなの、あり得ないです」

亜里沙はすっかり拍子抜けしてしまった。一瞬でも期待した自分がバカだった。心の傷が治る薬なんて、最初からあるわけがないのだ。

「信じられないのね」

「……だって、薬を飲んだ亜里沙じゃなくて、お母さんが行動を起こすなんて、どう考えても」

「いいわ。じゃあ、試しに一粒あげる」

亜里沙の言葉を遮ってそう言くと、女は小さな紙に錠剤を一粒く包んで、半ば強引に亜里沙の手に握らせた。

「え、あのー！」

「心が傷ついて苦しいときに、水で飲めばいいわ。騙されたと思ってやってみなさい」

「でも……」

「傷つけられたんでしょ？ その傷を癒したくて、ここへ辿り着いたんじゃないの？」

女は諭すように亜里沙の片手を優しく握った。亜里沙はゆっくり頷いて、その手をもう一方の手で握り返した。不思議な安心感に包まれて、やっぱりこの薬には不思議な力があるのではと思えた。

家に帰った亜里沙は、いつもの半分くらいの時間でと夕飯とお風呂を済ませ、自分の部屋へ戻った。興奮状態が治まらず、部屋の中を行ったり来たりしながら、さっきの出来事を思い返す。まだ信じられないけれど、どうせインチキだろうけれど、薬をこの手に握ったときの安心感が、本当にそんな奇跡が起こるのではないだろうか、という予感を亜里沙に与えていた。

すぐにも飲みたい気分だったが、家族が見ている前で何か変化が起こるのはなんとなく恥ずかしかったので、みんなが寝静まるまで国語の宿題をすることにした。宿題といっても、明日授業でやるところを読むだけだ。いつもなら、やったことになってしまうのだが、今日は何でもいいから時間を潰したかった。けれど、文字の羅列はそのまま頭の中を回り、どんなに意味を捉えようとしても無理だった。その時、部屋のドアが唐突に開いた。

「あれ、亜里沙まだ起きてるの？ まあ、勉強してるなんて珍しい」
母親の声に、心臓がビクツと跳ねた。感覚的には、亜里沙が走り

高跳びで跳ぶよりも、ずっと高く跳んだ。

「わ！　び、びっくりした。別に、宿題してただけだよ」

「そう？　お母さんたちもう寝るからね」

「う、うん、おやすみー」

「おやすみー」

ドアが閉まるのを確認して、そっと胸を撫で下ろした。なんだか悪いことをしている気分だった。この間友達に借りた漫画に出てきた覚せい剤を持っている人も、似たような感情を持っていたのではないだろうか。

やがて、家族みんなが寝静まって、家に静寂が訪れた。亜里沙はみんなが起きないよう、ゆっくりとゆっくりと台所へ向かった。早く歩いてはいけないのに、興奮しすぎて自然と早足になってしまった。けれど、誰も起きる気配はない。棚からコップを取り、水道を少しだけひねって、ゆっくりと水を注いだ。そして、包み紙を開けて薬を取り出すと、そっと口に含んで水でゆっくり飲み込んだ。すぐに何か起こるのではないかと身構えたが、まったく変化は現れなかった。

亜里沙はがっかりして、とぼとぼと自分の部屋へ戻った。ベッドに入り込み布団を頭までかぶった。忘れたいことがある時は、寝るのが一番だ。考えすぎて、これ以上デブになるのはごめんだ。目を閉じると、自然と睡魔が襲ってきた。

次の日、異常な寝苦しさに目を覚ました亜里沙は、自分の額に手をあててびっくりした。指先だけで触ってもわかるくらいの高熱だった。もしかして、昨日の薬のせいだろうか？　不安が胸をよぎる。とりあえず台所へ起きていくと、異変に気づいた母親が、あわてて駆け寄ってきた。

「大変、亜里沙ひどい熱よ。すぐに病院へ連れて行ってあげるから、とりあえず部屋で寝ときなさい」

「うん」

数分後、父親を送り出した母親は、亜里沙を支えながら近所の診療内科を訪れた。診療所なので細かい検査はできないが、恐らくインフルエンザだろうということだった。解熱剤だけ受け取り、すぐに家へ帰った。

風邪はひどく、解熱剤である程度熱は下がるものの、嘔吐を繰り返しご飯はほとんど喉を通らなかった。そうして一週間が過ぎ、担当医に薦められた亜里沙立病院へ行ってみることになった。そこで血液検査からレントゲンまで様々な検査を受けたが、納得のいく結果は出ず、とりあえず入院ということになった。

「はい、点滴しますねー」

そう言う間に、看護師はさつと亜里沙の手を取って、うつすらと注射の針が残る腕に突き刺した。注射嫌いの亜里沙も、さすがに入院二十日目ともなればいい加減痛みを感じなくなっていた。

亜里沙は、自分の体の変化に戸惑いを隠せずにいた。いつも使っているパジャマのズボンはずぐにずれてくるし、シャツの襟元からは肩が見えそうになっている。長い間、病院の質素な食事ですえろくに食事も採れず、点滴で栄養を補っていたせいだろう。鏡で見る顔は、ほとんどむくみがとれて、スリムとまではいかないが標準体型に近づきつつある。最近は、毎日鏡を見るたび興奮状態になっていた。もちろん、痩せたことに対してもだが、それ以上に例のクスリの効果が現れたことに感動していたのだ。そつと、シャツの裾をめぐってみた。ハムの塊が作れそうだったお腹は、ほんの少したるむ程度にまで削減されていた。

“デブ”って言われて傷ついた心を治すために、その根本的原因である“デブ”を消滅させようとしているのだ。周りの目を気にしつつも、亜里沙は顔がほころぶのを抑えることができなかった。そんな彼女を、同じ部屋の中年太りのおばさんが、訝しげに見ていた。亜里沙は、心の中で「おデブさん、こっち見ないでよ」と毒づいてみた。自分が誰かに“デブ”という言葉を使える快感に、なんとも

いえない快感を覚えて、亜里沙は上機嫌でこの間母親に買ってきてもらった雑誌を開いた。

入院から一カ月後。亜里沙はすっかり良くなって、ついに退院できることになった。

お世話になった先生に挨拶を済ませた亜里沙は、暇つぶしに読んでいたマンガや雑誌、それから着替えなんかを抱えて、父親の運転する車に乗り込んだ。明日から学校へ行ける。そう思うと、わくわくしてくる。いつもなら、今日は誰に“デブ”と言われるのだろう、また彼の前で笑われるかもしれない、そう考えるだけで胃がキリキリと痛んだものだ。

学校へ行くと、心配していた友達が駆け寄ってきて、みんな口々に「え、嘘、亜里沙？」だの「すごい痩せたね！」などとはやし立てた。その言葉の節々に、嫉妬心が混ざっているのを感じて、亜里沙は余計に鼻高々だった。両親とも綺麗な顔立ちをしているおかげで、肉を削ぎ落とした彼女の顔は、“美人”と呼ぶにふさわしいものになっていた。女子の歓声にこっちを振り向いた男子も、生まれ変わった亜里沙を見て目を丸くしていた。当然ながら、誰も彼女に“デブ”と言うものはいなかった。

授業中、四方八方から感じる今までは違う視線を浴びながら、亜里沙は、今日もう一度あの薬屋へ行こうと考えていた。あんなに素晴らしい薬をもらったお礼を言わなければ。それと、是非あの薬を売ってもらわないと。こんな体験をしたら、もう薬なしでは生きていけないだろう。それは、麻薬による依存症にも似た感覚だった。ふと斜め後ろを見ると、凧平と目が合った。けれど、彼はつまらなそうな顔をしてそっぽを向いてしまった。

授業が終わると、友達の誘いを断って、あの商店街へ向かった。さっきの彼の顔が頭に浮かんで、少し悲しくなった。

「こんにちは」

「あら……いらつしやい。久しぶりね」

中へ入ると、相変わらず爽やかな笑顔で迎えてくれた。

「お久しぶりです。あの、この間はどうも」

「その様子だと、効いたみたいね？」

何でもお見通しなのよ、とでも言いたげな笑みを浮かべて、女はあの小瓶を取り出した。

「これ、買いに来たんでしょ？」

「はい、何円ですか？」

「三粒入りで三千元。この間一粒あげたから、残り二粒よ」

「それ、ください」

一か月分の小遣いを使い果たすのはきついけれど、それ以上に亜里沙はもうこの薬に魅せられてしまっていた。

「どうしても必要な時にだけ、よく考えて使ってね」

女の声に深く頷いて、小瓶をカバンに仕舞って亜里沙は走り出した。嬉しさが体の中だけで留まりきらなかったのだ。風を切って走っていると、今まで以上に体の軽さを感じて、このまま飛べそうな気さえした。

やがて中学を卒業し高校生になった亜里沙は、未だ凧平のことを思い続けていた。高校では彼と離れてしまい、会えない日々が続く。恋とはまさに煩うもので、亜里沙は胸の痛みに耐え続ける日々を送っていた。

そして、ついに例の薬に手を出した。この辛い恋煩いを治したい。その思いよりは、この胸の痛みを利用して凧平に会えないかという企みの方が勝っていた。

傷薬

再開は突然訪れた。前日に飲んだ薬が睡眠薬の効果を発揮したのか、亜里沙は珍しく寝坊をしてしまった。亜里沙はいつもより一本遅い電車に乗った。

「あれ、もしかして渡辺？」

その声を聞いた瞬間、亜里沙の胸の中を何か甘いものが駆け巡った。振り返ると、そこに凧平拓真がいた。

「な、凧平！」

「やっぱり、渡辺？ 久しぶりだな」

「う、うん、久しぶり。いつもこの電車に乗るの？」

変に高い声が出るのを気にしながら、頬が赤くなっていないか心配しながら、それとなく探りを入れてみた。

「うん、大体、いつもこの車両のこの時間だな。渡辺は？」

「あ、えーっと、亜里沙は……今日からちよつと学校へ行く時間をずらしたの」

心臓の温度は、沸騰寸前までできていた。数秒で必死に搾り出した嘘は、当然、明日から彼と同じ電車に乗るためのものだった。「今度から、毎日会うかもね」と、なるべく自然に言いながら、亜里沙はちらつと携帯電話で時間をチェックした。

「そっかー。じゃあ、見かけたら声かけてな。俺もかけるし」

「うん、もちろん！」

「あ、俺ここで降りるわ。またなー」

「うん、またね」

次の駅で亜里沙も電車を降りた。そして、自分が乗っていた車両を確認して、学校へと向かった。

それ以来、亜里沙は毎日凧平と同じ電車に乗り、彼が下車するまで色々な話をした。彼が今通っている高校のこと、サッカー部のキヤプテンをしていること、地元のコンビニでバイトをしていること、そのバイト先の店長がバーコードハゲだということ、成績がクラストップになったことなど。彼のことを一つ知るたびに、恋心も一つ募っていった。

亜里沙も、学校のことや地元の駅前のカフェでバイトをしていること、それから友達のことなんかを話したけれど、彼の話に夢中でほとんど聞きに徹していた。中学校の時の想いが蓄積しているせい

か、今までのどんな恋愛よりも夢中になっていた。授業中も彼のこ
とばかり考え、勝手な妄想を膨らませ、時々、机に突っ伏して彼と
デートをしたりした。

そのうち、お互いに携帯番号とアドレスを交換して、授業中にこ
っそりメールをするようになった。二人ともバイトがある日は、待
ち合わせをして一緒に帰るようになった。会えない日は夜中に長電
話。その頃にはお互い、“拓真”“亜里沙”と呼び合うようになって
いた。

ある日、いつものように彼のコンビニへ寄った帰り、拓真は真剣
な声で「ちょっと話があるんだけど、いい？」と、亜里沙を近くの
公園へ誘った。街灯真下にあるベンチに腰掛けて辺りを見回すと、
さすがに真冬の夜に公園へ出かける人はいないようで、全く人が
なかった。真つ暗な闇の中に、二人だけがぼんやりと浮かび上が
った。

「話って？」

少し白々しい気もしたが、他に言葉が見つからなかった。何を言
われるのかわかっていても、緊張で心臓が高鳴り始めた。沈黙が続
く中、自分の心音だけが音を発していた。やがて、沈黙を破るかの
ように冷たい風が吹き抜けて、思わず亜里沙が「寒い！」と彼に身
を寄せたのを皮切りに、やっと彼が話し始めた。が、それは想像し
ていた話ではなかった。

「中学校の時さ、覚えてる？」

「中学校？ うん、まあ」

“デブ”だったという過去が封印されている中学校の話は、あま
り亜里沙にとって気持ちのいいものではない。

「亜里沙さ、その……結構太ってたじゃん？」

「……」

拓真の口から“デブ”という言葉聞いて、少し目眩がした。彼
の口からは絶対に聞きたくないと思っていた言葉を今さら聞いてし

まうなんて。亜里沙は「これ以上聞きたくない」と、枯れた声で呟いて席を立った。けれど、すぐに「違うんだ、聞いてくれ!」と、彼の手に引き止められてしまった。

「違う? 何が違うの? そんなことを言うために私をここに呼んだの!」

強制的に聞きたくないことを聞かされる不快感に、亜里沙は声を荒げた。けれど、彼は次の瞬間驚くような言葉を放った。

「俺は、あの時から……亜里沙のことが好きだったんだ」

「え?」

拓真は、亜里沙に考える隙を与えずまくし立てた。

「その、俺、デブ専ってやつで……」

「は?」

「だから、亜里沙のこと好きだけど、でも付き合えない! 最初は、それでもって思ったんだ。でも、やっぱりどうしても……ごめん」

「ちょよ、ちょよと待ってよ」

「期待させるようなこととしてごめん!」

「え、嘘でしょ!」

亜里沙の声は、彼の去り行く背中を虚しくかすっただけだった。彼女の中には、ハテナが残された。シヨックや怒りを感じる前に、とにかく意味がわからなかった。

やっと事の重大さに気づいたのは次の日。一限目の授業中に、多大な喪失感が亜里沙を襲った。まず、授業中に考えることがなくなってしまう。妄想する相手がいなくなり、授業中に亜里沙の携帯を鳴らすメールもなくなった。もちろん、友達からはたまに来るが、もともとそんなに友達が多いわけでもなく、時間がぼっかりと空いてしまったのだ。

お互いに両想いなのに、彼は自分の前から立ち去ってしまった。そう、それが一番辛かった。自分たちは実際、惹かれあっていたのだ。そして、今もきつと、好き同士なのだ。それなのに、自分が“デブ”でないというだけで、うまくいかなくなってしまったのだ。

それさえ除けば、三年越しのロマンティックな恋愛だったのというのに。

思えばあのとき、あの自分が痩せたときの彼のつまらなそうな態度は、そういうことだったのだろう。デブ専。世の中にそんな種類の人間がいることは知っていたが、よりによって彼がそうだななんて裏切られた気分だった。

制服のポケットに手を入れると、指が小瓶に触れた。中には、最後の一粒が入っている。この薬を使うのは、今しかないと思った。今回は、どんな効果が現れるんだろう？ 今回の原因は、彼の“デブ専”だ。それは、間違いない。ということは、何らかの方法でそれを直すことができるはずだ。

一限目が終わると、鞆の中からペットボトル入りの水を取り出し、薬を一気に飲み込んだ。少しでも早く彼を手に入れたい。早く彼に会いたい。そんな想いが、亜里沙を急かした。そして、早く効果が現れないかと、毎日期待しながら学校へ行っては、何も起こらないことに失望していた。

そのまま数週間が過ぎたが、まだ何も変化はなかった。その日、テレビで薬を飲みすぎると抗体ができて効きにくくなると知って、追加の薬を買うためにあの商店街へ向かった。ところが、店は既に廃屋状態で、割れた鏡が床に散乱していた。その不吉な光景に、亜里沙は嫌な予感がした。まさか……自分を悲しませた原因である彼が、彼自身が消滅してしまうのでは？ 急に恐くなって、亜里沙は急いで彼に電話をかけた。しかし、その電話は彼に繋がることはなかった。

彼は、消えてしまったんだ。私の傷を癒すために？ 冗談じゃない。彼がいなくなったところで、私の想いは決して消えはしないのだから。そう、亜里沙はまさに絶望の淵へと立たされていた。

そして、自暴自棄になった彼女はお菓子を食い漁り、その度に痩せなくてとはダイエットするが、すぐにまた精神不安定となりまた過食を繰り返した。彼女の体は、太ったり痩せたりを往復し、一年後

には中学校のときの体型へ戻ってしまった。

そこで亜里沙は気づいた。そうか、私たちが付き合えなかったのは私が“デブ”じゃなかったから。だから、この薬で私は太ったんだ。すぐく遠回りをしてしまったけれど、やっと彼に愛されることができんだ！ 亜里沙は嬉しくなり、久しぶりに外に出ることにした。そして、偶然とはすごいもので、以前バイトをしていたカフェで彼と再会を果たしたのだ。

懐かしい笑顔に、亜里沙は熱い感情が沸くのを感じた。一年たった今でも、彼への想いがあの時のまま残っている証拠だった。

「拓真！ ねえ、久しぶり！ 覚えてる？」

「え……」

「ほら、亜里沙だよ！ 渡辺亜里沙！」

「おおー、亜里沙？ うわー久しぶり」

それと同時に、拓真の顔が懐かしそうに笑った。その笑顔が昔のままだったので、亜里沙はあの頃に戻ったような、トキメキが戻ってきた。

「よかった、覚えてくれてて。元気だった？」

「うん、元気だよ。そっちは？ その……あの時はごめん。俺どうかしてたよ」

その言葉に、亜里沙の鼓動は加速する。公園でベンチに腰掛けて待っていた言葉を、やっと今聞くことができるのだろう。

「ううん、いいの。人の好みはいろいろだしね」

「ありがとうな。それにしても……お前太ったなー。あの頃の俺だったら、もろタイプだったよ、マジ」

「……え、あの時？」

「あ、そうそう。俺、彼女できたんだ」

「え、彼女？」

「うん、今ここで待ち……お、来た来た、美咲こっち」

「遅くなってごめんねー。あれ、この人誰？」

「ああ、紹介するよ。中学校からの知り合いで、渡辺」

「彼女の美咲です。よろしく」

そう言って、彼女は手を差し出した。そこから白い半そでのブラウスの袖口へと伸びる腕は、白く、折れそうなくらい細かった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0350c/>

傷薬

2008年11月9日16時45分発行